opusdei.org

聖ホセマリアの生涯 -51

1940年代、オプス・デイはめざましい発展を始めました。 これによってはっきり浮き上がった問題がセンターの管理 と司祭の欠如でした。

2024/06/14

過去の記事はこちらから

1940年代、オプス・デイはめざましい発展を始めました。これによってはっきり浮き上がった問題がセンターの管理と司祭の欠如でした。セ

ンターの管理の問題は前回見たよう になんとか解決の道筋がつきまし た。

司祭の問題というのは、オプス・デ イには司祭が聖ホセマリア以外にい ないという問題でした。神父はメン バーたちに霊的指導と養成に精力を 注いでいました。しかし、赦しの秘 跡は自分で聞かず、各自が好きな司 祭に赦しの秘跡を受けるよう勧めて いました。それはメンバーが神父に 手足を縛られた状態になることを避 けるためでした。しかし、やがてそ の不都合が明らかになり、メンバー の霊的指導とオプス・デイの統治の 什事に当たる司祭は、信徒のメン バーから出ないといけないと考える ようになりました。

ところが、これには法律的な難問がありました。当時の教会法によれば、司祭は自分が働く教区か修道会に属さなければならず、オプス・デ

イはそのどちらでもなかったからで す。この問題の解決のため、聖ホセ マリアは祈り考え、また教会法の専 門家に相談しましたが、答えは見つ かりませんでした。神が必ず解決し てくださると信じ、古参のメンバー の三人を選び、司祭になる気持ちが あることを確かめた上で、彼らに司 祭叙階の準備をさせました。その三 人とはアルバロ・デル・ポルティー リョ、ホセ・マリア・エルナンデス とホセ・ルイス・ムスキスで三人と も工学部を卒業し、仕事をしていま した。この状況を鑑み、司教の許可 を得て、当時マドリードにいた一流 の神学や教会法の専門家に頼んで、 個別授業をしてもらいました。

1943年2月14日(女子部の創立記念日)、女子のセンターでミサを立てている間に、神は神父に解決法を教えたのです。ミサが終わるとポケットから手帳を取り出し、「聖十字架司祭会」と書き、また小さな円とそ

の中に十字架という図を描きました。

尾崎明夫

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-51/ (2025/11/20)